

ヨーロッパのサッカーにみる
民族問題と人種差別問題

サッカージャーナリスト 大住良之

ドイツで開催された2006年のFIFAワールドカップ決勝戦で、フランスのキャプテンであり、この大会最大のスターでもあったジネディーヌ・ジダンがレッドカードを受けたシーンは、世界中の多くの人々にショックを与えた。1-1で迎えた延長戦の後半、ジダンは、イタリアのDFマテラツィの挑発を受け、なんと彼の胸をめぐめて強烈な頭突きをくらわしてしまったのだ。

「挑発」の内容は、なかなか明らかにならなかった。ジダンの家族に対する侮辱だったと、ジダンは説明した。しかしマテラツィの挑発に人種差別の要素がはいっていたと推察されるようになると、自制心を失って報復したジダンではなく、挑発したマテラツィへの非難が高まった。

ジダンは、1998年にフランスがワールドカップで初優勝を飾ったときの中心選手で、ブラジルを3-0で下した決勝戦では2得点をマークしている。そしてこの年のFIFA年間最優秀選手にも選ばれた世界のスーパースターである。だが同時に、フランス代表である彼の出自が、アルジェリアからの貧しい移民の息子であることもよく知られている。マテラツィの挑発には、アフリカ系のベルベル人に対する差別が含まれて

いたという。

人種差別は、現代のヨーロッパの最大の問題のひとつであり、社会をそのまま反映するヨーロッパのサッカー界でも重大な問題となっている。

ヨーロッパの社会の変化

ヨーロッパのサッカー界は、いま、ほんの15年ほど前までには想像もできなかったほど大きく変化している。

そのひとつはビッグビジネス化だが、もうひとつ、見逃すことができないのが黒人選手の大幅な増加だ。どの国のリーグにも、そしてどのクラブにも、たくさんの黒人選手がいる。その背景には、ヨーロッパの社会の変化と、サッカー界の変化のふたつの要素がある。

第二次世界大戦後から1960年前後にかけて、ヨーロッパの国々がもっていたアジアやアフリカの植民地が次々と独立を達成した。その時期に、数多くの旧植民地の人々がヨーロッパに移民した。またヨーロッパ内でも、労働力が余っている国、スペイン、イタリアなどから、足りない国、フランスやドイツなどへの季節労働・移民の動きがあった。続いて1975年以後、ヨーロッパの経済発展期にやってきたのが、とくにアフリカの旧植民地から、ヨーロッパの家族・親族を頼って移民する人の流れだった。

1998年ワールドカップで優勝したフランス代表は、こうした流れのなかにあった。ブラジルとの決勝戦には、3人の黒人選手が含まれていた。DFテュラム(フランス領グアドループ=カリブ海=出身)、DFデサイー(アフリカのガーナ出身)、そしてMFカランプー(南太平洋のフランス領、ニューカレドニア出身)だ。その他にも、北アフリカのアルジェリアからの移民の息子としてマルセイユで生まれたMFジダンと、ロシア内のカルムイキア共和国出身の父とアルメニア出身の母をもち、フランスのリヨンで生まれたMFジョル



2006年 FIFAワールドカップ
アルゼンチン 対 コートジボワール戦 (ハンブルク)

カエフがいた。決勝戦には出場しなかったが、この大会で若手FWとして活躍したアンリは、カリブ海のフランス領アンティル出身の両親をもち、パリ郊外で生まれている。

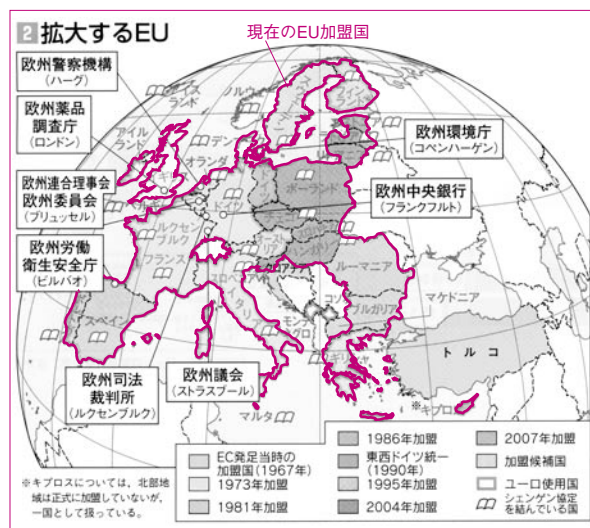
90年代のフランスは、すでに「多民族国家」と言ってもよかった。サッカーの代表チームの人種・出身民族構成は、そのままフランス社会の縮図だった。そして、国歌「ラ・マルセイーズ」と青・白・赤の三色旗のもとにさまざまな出自をもつ人々がひとつになったのが、98年のワールドカップ優勝だったのだ。

2 ヨーロッパサッカー界の変化

サッカー界の変化は、1995年の12月に起こる。1クラブでプレーできる外国人選手の数を制限したり、契約期間が終わってもクラブが「保有権」で選手を縛りつけることができるというそれまでの慣習は、サッカー界ではあまり疑問をもたれていなかった。だが、ベルギーのある選手がこれらの慣習を一夜にして突き崩してしまったのだ。

ベルギー代表にも選ばれない、平凡なプロ選手だった。しかし彼は、このサッカー界の慣習がEU（欧州連合）の基本法に違反していると訴訟を起こし、そして勝ってしまった。その結果、EU圏内の国籍をもつ選手は、契約期間が満了したら自由に他のクラブと契約できることになった。そして、EU圏内であれば、どの国のリーグでも制限を受けることなくプレーできるようになった。たとえばEU圏内のイギリスのクラブであるアーセナルが、そっくりEU圏内の国であるフランスの代表選手で占められることも可能になったのである。この新制度を、訴訟を起こした選手ジャンマルク・ボスマンの名を取って「ボスマン・ルール」と呼ぶこともある。

この結果、EU圏内に属する西ヨーロッパの国々のリーグは、以後5年ほどの間に急速に「国際化」した。21世紀を迎えるころには、主要クラブの多くは「多国籍軍団」になってしまったのである。それによって、EU圏外の国籍をもつ選手たち、南米、アフリカ、そしてアジアの選手たちがヨーロッパで活躍する機会も増えた。「外国人制限」を完全に廃止した国もある。



『新詳地理資料 COMPLETE 2009』 p.169

残している国でも、EU圏内の選手との競争はなくなったので、チャンスが広がられたのだ。

とくに恩恵を受けたのはアフリカ系の選手たちだった。その身体能力の高さから、アフリカの選手たち、とくにFWが続々とヨーロッパで高評価を受けるようになったのである。スペインのFCバルセロナで攻撃をリードしているFWエトー（カメルーン）、イングランドのチェルシーで得点を量産するドログバ（コートジボワール）、そして同じイングランドのアーセナルで活躍するアデバヨール（トーゴ）など、現代のヨーロッパのクラブサッカーを代表するFWの何人もがアフリカ人で占められている。

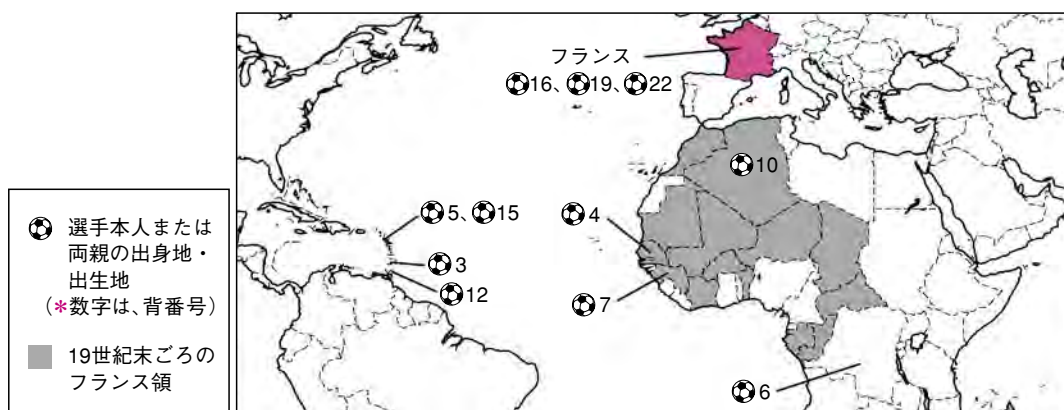
3 サッカーのなかでの人種差別への戦い

こうしたなかで近年顕著になったのが、サッカーにおける人種差別だ。

その多くは、相手チームのサポーターから標的にされるケースである。スペインで、そしてフランスで、憎き相手チームのエースに対して、サポーターが人種をあざけるためにサルの鳴きまねをしたり、バナナを投げ込むなどの行為が横行したのである。町なかで黒人に向けて同じことをしたら叩きのめされてしまうかもしれない。しかしサッカー場で、サポーターと選手という関係なら、報復されることもない。卑劣極まりない行為だ。

<参考> ●2006年ワールドカップ決勝戦のフランス代表の11人

背番号	ポジション	名前	選手本人または両親の出身地・出生地
⑩ 16	GK	バルテズ	南フランスのラブラネ出身
⑩ 19	DF	サニョル	フランス中部のサンティエヌ出身
⑩ 15		テュラム	フランス領グアドループ（カリブ海）生まれ
⑩ 5		ガラス	フランス生まれ、両親はフランス領グアドループ出身
⑩ 3		アビダル	フランス生まれ、両親はフランス領マルティニーク（カリブ海）出身
⑩ 4	MF	ビエラ	セネガル（アフリカ）生まれ
⑩ 6		マケレレ	コンゴ民主共和国（アフリカ）生まれ
⑩ 7		マルダ	フランス領ギアナ（南米）生まれ
⑩ 10		ジダン	フランス生まれ、両親はアルジェリア（アフリカ）出身
⑩ 22		リベリー	北フランスのブーロニュ・シュルメール出身
⑩ 12	FW	アンリ	フランス生まれ、両親はフランス領アンティル（カリブ海）出身



この行為を撲滅しようと、1999年にはヨーロッパにFARE (Football Against Racism in Europe) という組織がつけられ、2001年からは国際サッカー連盟 (FIFA) と、そして2002年からはヨーロッパサッカー連盟 (UEFA) と協力してサッカーの場での人種差別をなくすための運動を展開している。

2006年にドイツで開催されたワールドカップのひとつのテーマは、まさに人種差別との戦いだった。「Say no to racism」と書かれた大きなバナーが試合ごとに掲げられた。そして準々決勝の4試合が行われた6月30日と7月1日は、「反人種差別デー」と名付けられ、それぞれの試合前に、対戦する両チームのキャプテンが人種差別に反対するメッセージを読み上げた。もちろん、ブラジルと対戦したフランスのキャプテン、ジダンも、フランクフルトで行われた試合のキックオフ前にマイクの前に立ち、メッセージを読み上げた。そのメッセージは、ファンに対する呼びかけであると同

時に、選手同士の間での決意を表明するものでもあったはずだった。だからこそ、決勝戦で起きた出来事が大きなショックとなったのだ。

最も大きな大衆的人気をもつスポーツであるサッカーは、社会の鏡でもある。社会のひずみや不安定さは、そのままサッカーの試合に出る。1980年代に世界に蔓延した「フーリガン（サポーターによる集団的な暴力行為）」は、失業者の多い若者たちの不安を反映したものだ。そして現代の人種差別行為は、急激に国際化する社会に対応しきれない人々が起こしている反応に違いない。

サッカーは社会自体を根本的に変えることはできない。しかし社会に対し、とくに若者たちに対し継続的にメッセージを発し、考える機会を与え続けることで、社会を変えていく力のひとつにはなることができる。

だからこそ、「人種差別との戦い」は、現代のヨーロッパサッカーにおける重大なテーマなのだ。